



令和4年度(2022年度)第72回"社会を明るくする運動" 作文コンテスト
中学生の部【優秀賞】
歴史に学ぶ感謝の気持ち

鏡原中学校 2年 たかさと 高里 けんしん 堅真

今朝も登校時間になり、マンションからすぐ近くの県道の横断歩道に立つ。信号機のない横断歩道、すでに幼稚園や小学生達が小さな手を高々と上げて待っている。午前8時前朝のラッシュ時の県道。でも左右の車の運転手さん達は、挨拶運動のおばあちゃんが旗を上げない前に止まってくれる。運転手さん達の表情は優しい。僕達はそんな運転手さん達に守られ、安全に渡り終わると、左右に頭を下げ、「ありがとうございました」と感謝を込めて礼をする。

これは、僕が幼稚園の頃から見慣れた光景。幸い横断歩道を過ぎると百メートル位の安全な学道路に学校はある。校門では、地域のボランティア、保護者、先生方が迎えてくれる、とても賑やかな朝です。

あれは、僕が4年生の時だった。挨拶運動のおばあちゃんから、「ケンシン君も運転手さん達に礼を言う他に、車が通らない時でも礼をしてね」と言われた。僕は、その意味がわからないながらも言われた通り、車が途絶えた瞬間でも道路に向かって一礼していた。

そして、ある日、「なぜ車も走ってない道に向かって頭を下げるんですか」と、おばあちゃんに聞いた。すると、「あ、良い質問だ。その事を聞いて実行しているのは、あなただけだよ」と、学校の方へ一緒に歩きながら次のように話した。

「あのね、この立派なアスファルトの道路は、昔からこんなじゃなかったんだよ。今、生きていたら約150才位になるおじいちゃん達が機械も車も無い時代にツルハシやハンマーで岩盤を打ち砕き、荒れ地をさら地に開墾し、汗水垂らし、何年もかかって道の基礎を作ったんだよ。当時はセメントも無かったから、最初は石ころや泥んこ道だった。時代の進歩で機械化され、島中今のような立派な道路になったんだよ。その昔、道路を作ったおじい達の事を道普請のおじいさんと言って、歌も作られ、学校でもよく歌ったよ。だから、その方々への感謝を込めて、誰も居ない道路へ安全と共にお礼の気持ちを込めるのさ」と、話してくれた。

僕は、その事を聞いて納得し、登下校だけでなく、遠い昔のおじいちゃん達の苦勞を思いながら、頭は下げずとも心の中で感謝している。

その気持ちは全ての事に関係していると思う。親、隣人、友人、先生方、全ての人の何気ない行動にも自然に感謝の気持ちが持てるようになった。

人は、「挨拶をしなさい」だけでは理解出来ない事にも気づいた。何でも、その意味を説明し、納得し考えて行動し、実践に移す事が出来る。

今、僕は中学3年生、あの時の行動を続けている。僕達の学校に挨拶が根付いたのは約30年前、地元出身の与那覇先生(故人)が「礼儀正しい鏡っ子に」と、始めたのがきっかけと聞いている。物事は、継続してこそ力となる。僕の将来はまだ見えないが、歴史に学びつつ明るく平和な社会を目指したい。